

少年の塔慰霊祭



本年から8月に行うようになり、地域の方、教職員にも広く声をかけ、8月5日（土）伊那公園内「少年の塔」前において「少年の塔慰霊祭」が行われました。

当日は一般参加者・教育会会員・役員を含め約60名が参加し、全員による黙祷の後、矢澤教育会長から追悼の言葉、北原和夫先生のお話をお聴きしました。最後に、参加者全員で献花、焼香をしました。

これは「上伊那各地より満蒙開拓青少年義勇軍として満州に渡り、再び祖国の地を踏むことのできなかった青少年の御霊を慰霊し永遠の平和を祈念する」趣旨で、公益社団法人上伊那教育会の平和教育研修事業の一環として毎年行われているものです。

【 追悼の言葉 】

公益社団法人上伊那教育会会長 矢澤 淳

太平洋戦争終結から、七十二年の歳月が過ぎました。王道楽土の理想に燃え、満蒙開拓青少年義勇軍として中国大陆に渡り、志半ばにして荒野に散った九十余名の若い御霊に、謹んで哀悼の誠を捧げます。

「満州は日本の生命線」と言われ、昭和七年に満州国が誕生しました。計り知れない資源と広大で未開の原野を開拓して「王道楽土」を築き、国内の人口・経済問題を解決すると同時に軍事的にも北の守りを固めようとする、国策の一環として計画された満蒙開拓。貴殿達 義勇軍もその一翼を担わされたのでした。

国家総動員体制が強化されていく中、上伊那教育会も教師自身率先して大陸に渡り、また上伊那義勇軍父兄会を組織するなど、国策として積極的に取り組み、昭和十三年から終戦までに郡下で約五百名を越える義勇軍を送り出しました。そして、昭和二十年八月八日 対日戦線布告したソ連軍が次々に大陸を南下、「王道楽土五族協和」の夢は一瞬にして消え去り、関東軍の武装解除は極度の大混乱暗澹たる状況の中、貴殿達多くの義勇軍が若き命を落としていくこととなりました。

教えられるままに何の疑問も持たず純心に生き、そして若き命を異境の地に散らせた九十余名の貴殿達。台上に立つ少年の像は胸を張り、遙か遠くの何を見据えているのでしょうか。今、日本や世界の状況に目をやれば、いのちの尊さや平和に対する危機感を抱かざるを得ない出来事ばかりであります。

しかし、私たちは、今ここに頭を垂れ、過ぎ去りし日々思いを寄せると同時に、戦後七十二年を過ぎてなお、この上伊那教育会の負の遺産を決して風化させることなく、真摯に学び、永久平和への努力を改めて誓います。二度と、同じ過ちは繰り返しません。

九十余名の若き御霊よ、安らかにお眠りください。

平成29年8月5日

上伊那教育会元会長 北原和夫先生のお話



本日は早朝より、少年の塔の慰霊祭に出席いただきましたことに対し、生存者の一人として厚く御礼申し上げます。

この少年の塔が建立されたいきさつ等について、少し話をさせていただきます。碑文にも書かれていますが、お集まりいただきました多くの先生方の承知をしていることではありますが、「太平洋戦争中、幾多の若い生命が、満蒙開拓青少年義勇軍として、また、学徒動員として、祖国の平和を願いながら消えていったその若くして散った霊を慰めるために、この塔を建て永遠の平和を敬意するものである」と碑文に書かれているわけです。この塔

の作者は、郷土辰野町出身の芸術家瀬戸団治先生です。お願いしましたところ、快くお受けいただき作っていただいたわけです。この台石は岡山の桜御影石、碑文を書いていたのは、書家の藤澤正俊先生とあって、高等学校の先生でした。

この話が持ち上がったのは、昭和33年、矢島則敏先生、小林計實先生、青山弥八先生の頃でした。そして昭和34年青山教育会長の時に、代議員会にて議決して、建立ということになったのです。像が完成したのは、昭和36年4月、除幕式の日、桜花爛漫の好天に恵まれ、神仏両面の行事として行うことができました。上伊那教育会が主体となり、上伊那の市町村会へ陳情し、協力を得て建立となったわけです。もちろん各学校、PTA、児童生徒、教職員、先輩ほか、我々生存者も協力、浄財を拠出したわけです。金額にして、当時約85万余円が集まったと記憶しています。特に教職員組合の専従であった梅垣英人先生のご努力は忘れることはできません。

義勇軍の詳細について、当時の大東亜省から県へ指令があり、県から信濃教育会、各郡市教育会が中心となって希望者を募ったわけでした。昭和16年には、希望者は上下伊那で約200名、これが上下伊那の出身の原中隊で、1個中隊が編成されました。また昭和17年度には、私もその隊員の一人であったわけですが、上下伊那と諏訪で250名が集まり、中川村出身の小池吉郎先生が隊長を務める小池中隊が編成されました。

その隊では、後に上伊那教職員組合の専任書記を務めていた梅垣英人先生もご一緒でした。昭和18年は上下伊那と諏訪で250名が集まり、諏訪の出身者両角中隊が編成されたのです。それ以前は、中南信地区で1個中隊を編成され、宮下慶正先生が隊の幹部としておられました。原中隊は、ハルピンからさらに北の中ソ国境近くの伊拉吟訓練所に入所、私たち小池中隊は、ハルピンの北でしたが、伊拉吟より東北の鉄嶺大訓練所、中隊が集まる北満一の大訓練所に入所、翌年の両角中隊は、それよりまだ北の3校訓練所へ入所となったのです。そして、それぞれの隊で訓練中に終戦になり、終戦後はソ連の命令による列車で南下、我々の中隊は、ほとんど奉天にて下車を命ぜられ、そこで避難生活に入ったのです。避難してきて翌日からソ連の命により、奉天の三井・三菱・住友などの大工業地帯軍事産業、および三菱の飛行場などの修理、明けても暮れても毎日毎日重労働が続きました。そして、そこでの生活は、ソ連兵、中国人の略奪にあって大変惨めなものでした。

9月、10月、11月の3ヶ月、コーリャン飯のおにぎりを1日2個だけで、空腹に耐えながら朝のうちに昼食を食べるといふ有様、避難生活は食料も何もなく、ただ飢えと寒さで、熱病に冒され治療薬もなく、発疹注射や赤痢等々、朝になれば、息絶える人が続出、その有様は筆舌に尽くしがたいものがありました。だんだん仕事がなくなってきて、12月から翌年の5月引き上げまでの間に、どんどん犠牲者が出て、その経験は生涯忘れることはできません。当時20歳前後の青少年が、祖国の土を踏むことなく亡くなり、さぞかし無念だと心からご冥福を祈ってやみません。

一つ付け加えておきますが、お隣にある碑ですが、もともと諏訪地区にあったものですが、ここに少年の塔が建ったということで、一緒の方がよいだろうということで、ここを管理する伊藤神官さんの許可を得て、宮下慶正先生が中心になって移したものです。

いよいよ新教育課程実施、何かと現場の先生方も、考え、指導について、道徳、倫理モラルの問題、衣食足りてもものに対する感覚が麻痺し、誠に言語極まりない状況もあります。社会全体で、道徳、倫理、人間の不倒、人間の本当の絆、生命の尊厳を叫ばずにはいられない今日です。

平和の尊さをつくづく思います。先生方の意思や献身的なご努力に衷心より感謝と敬意を表します。本日はまことにありがとうございました。

慰霊祭に先立ち、8月4日（金）少年の塔 秋の周辺整備作業が行われました。
今回は中部を中心とした代議員の先生方と教育会役員で作業を行いました。



整えられた環境で慰霊祭ができましたことに感謝いたします。ありがとうございました。